

かまくら 女性史の会 Newsletter

第 120 号

2024 年 10 月 22 日 発行

〒248-0012 鎌倉市御成町 18-10
NPOセンター鎌倉 気付
メールボックス 26
E-mail: syokmat@yahoo.co.jp

《史の会のこと》

「かまくら女性史の会 Newsletter」に載る『史の会研究誌』の短評にはとても励まされてきました。

史の会の発足は 1988 年 10 月。例会の記録として「史の会通信」を輪番で発行、最新号は 423 号です。1 号は 1989 年 4 月、初会合からここまでの報告と各人のこれからのテーマの概要が書かれています。執筆は代表の江刺昭子、「活動の記録は必ず残す」が信条とここで教えられました。

『史の会研究誌』第 1 号 (1991 年) のタイトルは「大正の響きをきく」。女学校、実業補習学校、処女会、女工、社会事業家の評伝、女教師、娼妓と多岐にわたります。新しい女の姑斬り事件、自殺者の動向調査と 14 人 14 色。テーマは各人が決めます。作家・ささきふさの評伝は次号で深められ、第 5 号で遺族から託された資料を公開する役割をはたします。資料の整理法や校正、女性史の視点の確立と適正な用語の使用を江刺昭子に学び、会員相互にも学びあう日々がスタート。(カッコ内は発行年)。

第 2 号「時代のうねりを見つめて」(1993 年)。1 号で娼妓を扱った会員はこの 2 号と次の 3 号でも娼妓の解放への長い道筋を辿り、4 号で基地の問題へ。女性解放運動家、慈善活動家、作家の評伝。

第 3 号「時代の目覚めをよむ」(1996 年)。横浜婦人矯風会、生活改善運動、地場産業の歴史、大正デモクラシー期の横浜を体現する作家の評伝、女性解放運動から原水爆禁止運動へ、女性の政治参加など。イギリスに 1 年留学した会員が「20 世紀を学ぶ中学生」で、現代史教育の実際を報告します。

第 4 号「女たちの物語を再生する」(2001 年)。大陸の花嫁の実態、画家、新劇女優の評伝。女医、養蚕製糸、婦人参政権運動など。地域女性史編纂に係る問題を、千代田区を例に江刺昭子が体験を記録します。評伝の取材中に、『神奈川県史 別編 1 人物』の「杉浦翠子」は埼玉の人と判明！メンバーは 9 人。

第 5 号『武相の若草』を読む (2016 年)。青年団の機関誌全編に見る若者の真摯な生き方。指導側の思想善導に巻き込まれ便乗もして、ときに抵抗もひそむ、戦中体制を実感しました。

第 6 号「振り返りつつ、今をよむ」(2020 年)。県の女性政策に関わった 3 人と横浜大空襲を伝える人の聞き書き。能楽師の評伝、横浜の華麗な一族の物語、元市議の終活。会員の「女性史とわたし」を公開。

第 7 号「未来へ、伝え続ける」(2024 年)。演出家の貴重な聞き書き、遺族の新証言を含む作家の評伝、生活者から議員へ、敗戦直後の横須賀の稀有な婦人会、広島に関わり続けた活動家。メンバーは 7 人。

『史の会研究誌』は県内図書館及びインターネットで読めます。NPO 法人ウィメンズ アクションネットワーク (WAN) のミニコミ電子図書館に所蔵されています。HP (wan.or.jp)。

2005 年、2011 年、2019 年に『時代を拓いた女たち』I～III 集で、神奈川県関連女性 354 人のミニ評伝を紹介しました (III 集「かながわ女性史研究会」編著)。90 年代から江刺昭子を中心に女性史資料の保存と公開を求めて努力してきました。1～III 集の資料を国立女性教育会館の女性デジタルアーカイブシステム (nwec.go.jp/) に寄贈、公開が実現しました。

2024 年 10 月 1 日

史の会会員 三須宏子

《例会記録》

2024年9月21日(土) 13:00~16:45

鎌倉市中央図書館 多目的室 出席者5名

- 1) Newsletter 119号について(編集:石崎)
- 2) Newsletter120号について(編集:多和田)
- 3) 「かまぐらの保育IV」進捗報告
- 4) 『通史』読み合わせ p.287~293



★シリーズ:私たちの「戦争体験」 No. 44

「広島の被爆体験を鎌倉で語り継いで」③

話者 景山邦子 聞き書き 平田恵美

○似島(にのしま)へ逃げる

4人姉妹の2番目の姉は友達と二人で似島(にのしま)へ逃げました。瀬戸内海の似島は「検疫所」があるところです。

二人は女学生で、朝から町なかで建物疎開の片付け作業をしていました。町なかの何も物陰のないところで被爆したんです。みんな泣きわめいていたところ、「海の方へ逃げろ」という兵隊さんの声で、二人は手をつないで逃げながら、姉は「うちの父は医者です」と言っていたそうです。たくさんの方が逃げてきて、軍のトラックで運ばれて、さらに船で島へ行ったようです。2番目の姉といっしょに亡くなった友人は、後年私が結婚した主人の妹でした。

一番上の姉は少し離れた被服廠にいたので怪我をしてなかったんです。2番目の姉の別の友達のえみちゃんは火傷で顔がくしゃくしゃになっていたそうです。自分が死ぬ数時間前でしたが、「隣の人に水をあげてください」と小さな声で言っていたんです。でもその隣人はすでに死んでいました。(続く)

※2024年10月11日、日本原水爆被害者団体協議会(日本被団協)がノーベル平和賞を受賞しました。草の根の運動により「核兵器のない世界実現を目指して努力し、核兵器は二度と使われてはならないのだと目撃者の証言から示したこと」が授賞理由とのこと。おめでとうございます。

2024年10月1日(火) 13:00~16:45

鎌倉市中央図書館 多目的室 出席者4名

- 1) Newsletter120, 121号について
- 2) 「かまぐらの保育IV」進捗報告、今後の計画
- 3) 『通史』読み合わせ p.293~297

★史の会研究誌7号から③

特別寄稿『逗子と女子学徒勤労動員』感想

2025年逗子市は市制70周年を迎える。「逗子の女性の歴史を記録する会」は、70周年の記録を残すには「逗子と女子学徒勤労動員」を取り上げ今後継承したいと序文に掲げている。

横須賀海軍工廠に徒歩通勤可能な、沼間第4宿舎には全7寮1800人の女子が入寮した。女子学徒勤労動員の実態は『海鳴りの響きは遠く 宮城県第一高女学徒勤労動員の記録』(2007年草思社)から引用されている。

1944年11月2日、仙台駅から上野行団体列車で4年生91人が「宮城県学徒義勇隊一高女」と書かれた腕章を巻き、県下6校の生徒と共に逗子に向う。3日10時過ぎ到着、雨。トラックに分乗しぬかるむ道を寮へ。作業は火薬を扱う仕事が多く、特攻兵器「桜花」の噴進器作業は極秘の中で行った。食事は芋ご飯、南瓜のすいとん、食糧事情が悪化すると高粱飯が多くなった。12月頃から病気やケガが増えた。空襲警報は45年になると激しくなり寝不足になった。2月、受験のため仙台や東京に行く人が増える。3月29日寮の食堂で卒業式。その後帰仙した者は、工場から非国民呼ばわりされる事もあったという。

宮城第一高女(現宮城第一高等学校)は私の母校で、より身近な話として受け止めた。横須賀海軍工廠には県内外38の女学校から動員されていた。(石崎)

2024年11月の例会&作業

5日(火) 13時~ 中央図書館多目的室

16日(土) 10時~ 中央図書館多目的室

30日(土) 午後 中央図書館(展示作業)

(第120号編集担当 多和田)